

河西と寧夏における沙井文化の影響

—沙井文化再考—

横 田 禎 昭

目 次

はじめに

1. 沙井文化とは如何なる文化か
2. 寧夏における沙井文化の遺跡
3. 壮大なる東西文化交流

終わりに

はじめに

中国の西北、甘肅省蘭州で黄河を渡り北西方向へ新疆ウイグル自治区のタリム盆地へ通ずる道は河西回廊と呼ばれ、南方の祁連山脈と北方の騰格里砂漠、アラ善砂漠地帯との間に、武威、永昌、張掖、酒泉、安西、敦煌へと続く緑豊かなオアシス群を形成している。中国では古くから西域へ通ずる道として、このオアシスルートこそ、羌、戎、月氏、烏孫、匈奴などの幾多の民族が興亡衰退の歴史ドラマを展開し、東西交渉史上きわめて重要な役割を果たしてきた地域であった。

河西回廊は、南山山脈またの名を祁連山脈と呼ばれる、最高峰は5,808m、全体としては海拔4,000m級の高い山並みが西北西の敦煌付近から東南東方向に向けて蘭州の東北方付近までのおよそ1,000kmにわたって連なり、青海と甘肅省の境界ともなっている。一方、北側は全体では戈壁砂漠を構成するが、地域別に甘肅と寧夏回族自治区の北部にアラ善高原(流沙地帯)、その南は騰格里砂漠、その西北に巴丹吉林砂漠が広がっている。祁連山脈から流下する雪解け水は幾筋もの川(伏流水)となって北流して砂漠の中に消えるか、または、いくつかの小さな塩湖に注ぐ。この幾筋もの川が集まって比較的大きな河となって砂漠に深く入り込むものが二つある。一つは、張掖、酒泉付近の弱水が北流して額濟納旗西北の居延海に注いでいる。もう一つは、武威を流れる白亭河(白羊河)である。武威県は蘭州から約230km行ったところの南山山脈の北麓に形成された合流扇状地上に位置している。武威から北におよそ25kmも行くともう砂漠が押し寄せていて、そこからは茫漠たる騰格里砂漠が広がっている¹⁾。沙井文化の標準遺跡である沙井鎮は武威から90km砂漠に入り込んだ白亭河のほとりに位置する民勤県オアシスの近くにある。自然環境は基本的には、年間降水量も殆どない乾燥の著しい地域で牧畜に適しているが、河川の流域や

水量豊かなオアシスが利用できて水の得られる地点は農耕が可能となる場所を形成している。しかし、砂漠の中にあつて西居延海（嘎順諾爾）一帯と甘南高原は農耕ができず、牧畜に好適な地域が展開される。特に、南山山脈の北麓沿いに展開する漠南の草原地帯は海拔1,500km前後の起伏がそれほど激しくない景観をみせており、蘭州から敦煌まで、あるいは、もっと西の陽関や玉門関や天山の南北路に通ずる比較的安全な交通路として古くから拓かれた。

近年、この河西回廊から沙井文化の遺跡が報告されており、この地域の青銅器文化と、その担い手としての月氏について考古学的資料と文献史料を通して考察する²⁾。

1. 沙井文化とは如何なる文化か

沙井文化は甘肅省民勤県（旧鎮番県）の沙井遺跡を標式とする青銅器文化で少量の彩陶、石器、青銅刀子、青銅の三角翼鏃、中央部が丸く膨らんだ青銅管状飾りと、馬蹄形に曲げた金製の針金などが出土している³⁾。その後、永登県榆樹溝遺跡、永昌県三角城遺跡と蛤蟆墩遺跡から少量の鉄器が青銅器と共存し、辛店文化や寺窪文化といった甘青地区の他の青銅器文化とは別系統の青銅器文化であることが分かった⁴⁾。その分布範囲は、民勤県の他に永登県、古浪県、武威県、永昌県、金昌市、山丹県、張掖県などの河西回廊の東部地域を中心とし、その東端は寧夏の中衛県西部にまで及んでいる。そして新疆ウイグル自治区東部の戦国時代の遺跡の木壘県四道溝遺跡や奇台県半截溝遺跡の出土遺物の一部に沙井文化の影響が指摘されている⁵⁾。

1921年J. G. Anderssonが河南省滎池県仰韶村において彩陶と磨製石器を伴う新石器文化を発見した。そして、この新石器文化は発見された遺跡に因み仰韶文化と名づけられた。Anderssonは仰韶村出土の彩陶が旧ソ連領西トルキスタンのAnau遺跡のそれに酷似することを知り、彩陶が西アジアからシルクロードを経由して黄河流域に伝播したものと想定し、そのルートとして甘肅地方が重視され、とりわけ河西回廊が注目された⁶⁾。そして1923～24年、Anderssonは彩陶の源流を求めて洮河流域から蘭州一帯、青海省西寧付近と河西回廊を踏査した。沙井遺跡はこのような状況の中で発見された⁷⁾。民勤県の西15kmのところにある沙井遺跡の六府屯と呼ばれる地点で、砂丘上に墓地と周辺を土壁で囲んだ遺構（土城址）が発見されている。そして墓地と土城址の両方から有翼の銅鏃を含む青銅製品、子安貝、トルコ石製飾珠などが発見された。土器は陶質が比較的粗く器形も多様である。彩文のある土器は少なく、また土器の一部に紅色陶衣を施したものがある。彩陶の文様は連続する直立三角形文や鳥形横帯文などのような比較的精緻な図案を紅色顔料で描いている。Anderssonは、これらの彩陶がイラン南西部ホジスターン地方スーサ遺跡出土の鳥形文様の彩文土器にきわめて似ていることを指摘し、両者の文化が相互に関連あるものとみなした。しかし、沙井文化はスーサに比較して遅い段階のものであるため、その関係は薄いと言わざるを得ない。墓地から53体の人骨が発見された。人骨は、頭を北に置く仰臥および側臥伸展葬が多く、体の上半もしくは頭部の周囲に副葬土器を置き、紅玉髓製の珠、トルコ石の小玉、子安貝製飾り、小型の青銅飾りなどの装身具が着装部位から発見された。第45号墓の人骨の脊椎骨には四稜翼の青銅鏃が射こまれていた。この人物は戦闘で死亡したのに間違いない。このタイプの銅鏃や三稜翼形銅鏃は、スキタイ系青銅器文化の影響を受けた騎馬遊牧民族特有のもので、ユーラシア大陸各地で発見されている。

また、この墓から出土した環頭の青銅刀子は、これに類似のものが河北省の灤平県や宣化県に出土する、いわゆる、オルドス青銅器（北方系青銅器）に酷似している。また、第10号墓から出土したS字形渦巻状の青銅飾りも、まったく同じ形式で造形的な特徴が完全に一致するものが灤平県から出土している。さらに中央部が球状に膨らみ管の両側に数条の平行沈線文が入る管状飾り金具は、寧夏の遺跡だけでなく内蒙古自治区杭錦旗の桃紅巴拉遺跡⁸⁾や烏拉特中後連合旗の呼魯斯太遺跡⁹⁾の匈奴墓出土の管状飾り金具と完全に一致しており、これらの間に共通するスキタイ系青銅器文化の伝播として有意な関係のあることが分かる。

2. 寧夏における沙井文化の遺跡

寧夏では、中衛県西台郷双度村狼窩子坑遺跡で11基の墓葬が発見された¹⁰⁾。墓葬はすべて長方形竪穴土坑墓で、青銅器、土器、骨器、砥石、石勺、トルコ石製珠などと動物犠牲がある。青銅器は種類が多く、短剣、鶴嘴、戈、刀子、矛、鏃、鏃、錐、帶鈎、透かし彫り龍文飾り板、馬銜、馬面（馬の額飾り）、鈴、鳥頭飾り（立式馬飾り）、盤角羊頭飾りなどに混じり2本の銅柄鉄剣がある。この銅柄鉄剣を含む青銅器の特徴から、狼窩子坑遺跡の年代を春秋晩期に比定されている。一方、狼窩子坑遺跡出土の青銅器のなかの渦輪形銅牌飾り、鏟形銅牌飾り、馬面、鈴鐘などは、1980年に甘肅省永登県榆樹溝遺跡で発見された沙井文化の墓葬の青銅器と同じであるところから、両者の間に交流関係が存在していたことは間違いない¹¹⁾。

沙井文化の墓葬は、蛤蟆墩遺跡が代表している¹²⁾。墓葬には竪穴土坑墓（8基）と偏洞室墓（12基）の2種類があり、この遺跡では偏洞室墓が主流となっている。偏洞室墓はM15号墓を例にすると、まず深さ230cmの長方形竪穴（墓道）を掘り、その片方の側室壁に洞室を掘る形式で、洞室の床は竪穴の床面よりも一段と低く掘り下げられる。つまり洞室の床面と墓道のそれとの間には段差がある。遺体は洞室内に木製容器、鞘付き青銅刀子、トルコ石製珠などの副葬品と共に仰臥伸展位に置かれ、洞室開口部を木柱を並べ立てて塞いでいる。そして墓道を半ば埋めた段階で犠牲獣を入れたようで、填土の中層に馬と羊の頭骨がほぼ水平に発見されており、この位置で供献の儀式を実施したことが想定される。偏洞室墓および洞室墓は、寧夏では固原県于家庄遺跡（春秋～戦国期）¹³⁾と同県楊郎遺跡（春秋～戦国期）¹⁴⁾の西戎墓や、同心県倒墩子遺（前漢晩期）¹⁵⁾の匈奴墓にある。しかし、于家庄遺跡と楊郎遺跡の洞室墓は、傾斜したトンネル状ものが主流で、蛤蟆墩遺跡の洞室墓の構造と決定的に異なっている。また、于家庄遺跡、楊郎遺跡、倒墩子遺跡の場合、犠牲獣はすべて墓道の床面に置かれる。犠牲獣を填土の途中に置く例は一般的な風習でなく、しかも内蒙古の匈奴墓には見られない。因みに、1960年代に入ってから調査された内蒙古自治区の准格爾旗速機溝、西溝畔、玉隆太遺跡や伊克昭盟杭錦旗桃紅巴拉遺跡など多くの匈奴墓¹⁶⁾は、竪穴土坑墓に木棺を伴うケースが一般的であって偏洞室墓は見られない。

したがって、沙井文化の偏洞室墓および寧夏の于家庄遺跡、楊郎遺跡の洞室墓は、匈奴とは時期的にも関係がないものになる。また、沙井文化の¹⁴C年代はB.C. 1310年～B.C. 789年を示している。これは中原の西周から春秋時代に併行しており、この時代に寧夏の中衛県西部から河西回廊の東部にかけて、匈奴とは別の北方系青銅器文化の特徴をもつ牧

畜または遊牧系の民族が存在していたことは間違いない。匈奴が機動性豊かな遊牧騎馬民族として歴史に登場するのは戦国時代のB.C.318年に韓・魏・趙が匈奴を率いて秦を攻撃した事件からである。それ以前には当然ながら匈奴の前身である遊牧民族がいたわけで、『史記』索隠に「夏曰淳維 殷曰鬼方 周曰獫狁 漢曰匈奴」の一条にあるように、殷代には鬼方、周代には獫狁とか葷粥と呼ばれた民族であるが、まだ、この段階では青銅の武器で武装し攻撃的な騎馬民族に変貌していなかった。

文献によると秦漢以前の河西回廊に居たのは月氏か烏孫である。『史記』大宛列伝に「始月氏居敦煌、祁連間、及為匈奴所敗、乃遠去」、また『漢書』張騫李広利伝に、「臣居匈奴中、聞烏孫王号昆莫。昆莫父難兜靡本与大月氏俱在祁連、敦煌間、小国也」、『史記』大宛伝、註の正義に、「初、月氏居敦煌以東、祁連山以西。敦煌郡今沙州。祁連山在甘州西南」、『史記』匈奴列伝、括地志註に「涼甘肅延沙等州地、本月氏国」とあって、月氏の旧地が敦煌以東甘州西南とすると、新疆東部の沙井文化の影響の遺跡とも重ならず、また、河西回廊東部の沙井文化の集中する分布範囲とは、その西端部のみが重なるに過ぎなくなり、考古学的資料との整合性が薄くなる。『史記』の記述は恐らく事実ではない。匈奴の勃興以前は月氏の勢いが盛んで、東の東胡の間にあつて、冒頓単于は月氏の人質になっていたくらい弱小民族であつた。したがって、月氏は形成上西北蒙古から河西回廊の東部と西部を含む地域を奄有する大国でなければならない¹⁷⁾。

寧夏の中衛県の北は内蒙古自治区の騰格里砂漠が広がっており、また西方は中衛県の西で甘肅省の河西回廊の武威に直接つながっており、秦以前のかなり早い時代から蘭州（前漢代に金城県を設置）を經由しないで西域に行く交通路であつた。『史記』秦本紀の戦国秦の恵文王の五年（B.C.320年）の記事に「王游至北河」の北河は、寧夏の塩池や靈武に比定されている。前漢武帝の元狩2年（B.C.121年）春に敢行された驃騎將軍霍去病の河西制覇の大遠征は、隴西から万騎の兵を率いて河西地方にいた匈奴を攻略し、焉支山を過ぎること千余里、多数の捕虜首級をあげる大戦果を収めた。また、この年の夏の作戦も驃騎將軍は合騎侯とともに数万騎を率いて北地から出撃し、今の寧夏を抜けて阿拉善砂漠へ出て漠北の匈奴の本隊との連絡を絶ち、居延を抜けて南進して祁連山一帯を攻撃した。匈奴の右賢王が支配する最も重要な西方拠点に対する攻撃であつた。そして、この戦いで匈奴の酋塗王ほか、五王と五王の母、単于の閼氏、王子等々、多数の貴族を捕虜にし、数万の斬首虜を得る大戦果をあげた。かくして、かつて冒頓単于がB.C.176年にこの地方にいた月氏を攻撃して西遷させて以来、半世紀にもわたって支配していた匈奴は、西域経営による利益や祁連山脈南麓の馬の格好の繁殖地を失った。『西河旧事』に、「我が祁連山を失い、我が六畜をして蕃息せざらしむ。我が焉支山を失い、我が婦女をして顔色なからしむ」とあって、河西地方に準拠していた匈奴にとって一打撃であつた。

3. 壮大なる東西文化交流

シルクロードは前漢武帝の時期に張騫によって拓かれ、西域との間に正式の通交が行われて、東西文化交流に輝かしい1ページを開いたことは周知のとおりである。しかし近年、新疆ウイグル自治区や甘肅省の河西回廊一帯の考古学的調査の進展につれて、中央アジア、西アジアなどの、いわゆる西方世界との交流は相当古い時代から行われていたことを示している。その一つは、青銅器文化である。金属器を造る技術の発明は人類にとって大変画

期な出来事であった。最初の青銅生産は、B.C. 4000年頃西アジアで始まった。そしてその技術は、西アジアから東アジアへと伝播した。新石器時代晩期の甘肅仰韶文化馬家窯類型の甘肅省東郷県林家遺跡の住居址から青銅刀子と灰坑から銅渣が発見されている¹⁸⁾。この遺跡の¹⁴C年代はB.C. 2740年を示している。また馬廠類型の甘肅省酒泉県苜蓿地遺跡と照壁灘遺跡からも鑄造の銅の塊りと鍛造の銅錐の発見があり、この地で青銅が造られたことは間違いない¹⁹⁾。青銅器文化の伝播の背景には、当然ながら人の交流が存在していた。新疆省ウイグル自治区の青銅器を伴う羅布泊孔雀河古墓から出土した人骨は、モンゴル人でなくてヨーロッパ人であることを形質人類学者が明らかにした²⁰⁾。この遺跡の¹⁴C年代はB.C. 2886年～B.C. 1530年を示すが、青銅器の出た墓の年代はB.C. 1800年代が妥当である。また新疆東部に位置し、甘肅省の西部と隣り合う哈密盆地の焉不拉克墓地で発見された29体の人骨のうち、モンゴル人が21体、ヨーロッパ人が8体という結果が判明しており、同じ墓地に蒙古人種とユーロペオイドが共存していたことが考えられる²¹⁾。哈密地区は張騫以降のシルクロードの天山北路である。また、天山山脈南麓タリム盆地の北辺に位置する新疆ウイグル自治区和静県察吾呼遺跡は青銅器時代から初期鉄器時代にかけての大規模墳墓群で、遊牧民の文化である²²⁾。この墓地の人骨の中にもユーロペオイドの特徴をもつものがあると報告されている。また、この遺跡の¹⁴C年代はB.C. 1000年～B.C. 500年を示している。この年代は黒海沿岸のスキタイ民族の大活躍時代と大体一致している。青銅器・鑄造技術・遊牧と馬をコントロールする技術・黄金文化等の諸要素を保有するユーロペオイド民族は限られてくるが、スキタイ人の東漸とするには、まだ考古資料が不十分である。しかし、かつてAnderssonが指摘したようにスキタイ系の青銅器文化は、間違いなく東方へやって来ているのである²³⁾。それは中国華北や寧夏、内蒙古の遺跡におけるグリフィンや動物闘争紋で飾られた青銅器が戦国時代晩期から漢代まで流行するののも一つの例である。

ユーラシア大陸の北部地域を東西に横たわる草原地帯を舞台とする壮大な東西文化交流が確実に存在した。ともかく、ユーロペオイドの人たちは、従来考えられていたのより相当古くから、幾度かの波のごとく東方にやって来て青銅器文化だけでなく様々な文化を伝えた。また、陝西省の周原遺跡では西周晩期の大型建物基壇の調査時に2点の貝製の人物頭部像が発見された。2点とも男性像で、耳まで覆う先が尖り気味の帽子を被り、高鼻深目、窄面薄唇の容貌は蒙古人種の特徴ではなくしてユーロペオイドの特徴そのものである²⁴⁾。さらに帽子の頂部に刻まれた卍紋様は、1978年、アフガニスタン北部のShibarghan付近のTilla-tepe第4号墓(50歳ぐらいの男性)出土の小刀を納める黄金製の鞘金具の文様にあるという²⁵⁾。Tilla-tepeの6基の墓から出土した副葬品は、総計2万点を数え、その大半が黄金製の装飾品から構成され、まさに「Shibarghan遺宝」と命名された所以である。この墓の年代は、Parthiaのコインや中国前漢鏡などの資料から紀元後1世紀半頃とされ、また墓の主は大月氏とする説がある。冒頓単于がB.C. 176年頃に敢行した第2回目の月氏攻撃により河西方面から本拠を天山山脈の北方、伊犁地方に西遷したのが大月氏である。しかし、張騫が大月氏の元に着いた時には、『史記』大宛伝に見える「乃遠去、過宛、西擊大夏而臣之。遂都媯水北為王庭」の一条にあるごとく、大月氏の中心は天山、伊犁地方からさらに移動し、アフガニスタン北部や媯水(アムダリヤ)の北にいて、大夏を支配していた。このように月氏が故地の西北蒙古からアフガニスタン北部までの数千kmの移動

は、中央アジアの歴史上画期的な大事件であった。

一方、Rudenko. S.I. は、B.C.6世紀からB.C.3世紀に栄えた遊牧民の文化で南シベリア、アルタイ山地のパジリク古墳を造営した種族は、「サカ人と同じユーロペオイドであった中央アジア種族に属したこと、そして、それは中国資料で月氏と称せられた種族」であると主張している²⁶⁾。護 雅夫も、パジリク古墳は月氏に関係するとし、ヘロドトスの記述の中で、「王族スキタイ」に反乱を起こした「分離せるスキタイ」がアルタイ地域近辺に住んでいたように記されているから、彼らがパジリク人であるとともに月氏の祖先ではないかと推理している²⁷⁾。サカとは中央アジアにいた遊牧民族でスキタイ人と呼ばれることもあり、ヘロドトスの『歴史』(第7巻64節)に、「先の尖った帽子を被り、ズボンを穿き、独特の弓と短剣、さらにサガリスという戦斧を携行している。ペルシャ人はスキタイ人をすべてサカイ人と呼ぶ」と記述している。アケメネス朝ペルシャのダレイオス1世(B.C.521~B.C.486)の碑文(Naqs-i-Rostam)に、Saka Haumavarka, Saka Tigrakhauda(尖帽のサカ人)、Saka Paradrayaの名があり、その居住地について諸説があるが、榎一雄は、「アムダリヤ流域およびその東方山地に比定されている。古代ペルシャではその北東・北・北西の国境地帯の遊牧・騎馬民族をこの名で総称した。(中略)B.C.2世紀の中ごろ、大月氏の西方移動におされてシル・ダリヤ流域のサカ族の一部が西方に移り、他の3民族と協力してバクトリア王国を滅ぼしたが、つづいてきた大月氏に追われて南下し、アフガニスタン南部」に移動したと指摘している²⁸⁾。騎馬による遊牧を生業とする集団は、社会組織、芸術や慣習、武器や馬具などに驚くほどの共通性が見られるのであって、西方にいたものをスキタイと、また東方にいたものをサカと呼んだのである。

終わりに

『漢書』西域伝によれば、「保南山羌、号小月氏」とあり、月氏が匈奴に追われて西遷した際に、移動しなかったものが小月氏となった、とある。南山は祁連山脈のことで、そこにいた羌の中に遁れた月氏をいう。また『後漢書』西羌伝にも「湟中月氏胡、其先大月氏之別也、旧在張掖酒泉地」とあって、湟中、すなわち青海にも月氏がいたと解釈できるし、月氏の故地は張掖、酒泉の地であったという。青海は本来、羌がいる地域である。河西回廊東部から湟中にかけては、羌、戎、月氏の民族がモザイク状に居住していた。『寧夏通史』古代卷に、前漢代に匈奴人を安定郡三永県、現在の同心県内に居住させ、匈奴の生活習慣を保たせた。後に現在の隆徳県内に月氏道を設置し、月氏人を居住させたとある²⁹⁾。同心県の倒墩子遺跡は、その年代を副葬品から後漢初期、漢に降った匈奴人の可能性が高いと考えられているが、内蒙古の匈奴墓は木棺を伴う豎穴土坑墓で偏洞室墓でない。むしろ、匈奴の旧部族国家に組み込まれた少数民族「戎」である可能性が高い。また、前漢武帝の元鼎3年(B.C.114)に、漢初に設置された北地郡の西北部に安定郡を設置し、この中に月氏道を設けて月氏の降るものを居住させた。さらに清代康熙年間の『隆徳県志』に、漢の月支(氏)道は今の隆徳県の地であると言う³⁰⁾。隆徳県の歴史に「西漢初置略畔道、以境内略畔山(則六盤山)得名。後改月氏(音:肉支)道、以境内居住小月氏族得名、治所月氏城。東漢時改月順道」とあり、二通りの解釈ができる。その一つは、匈奴も月氏も降者への処置であるため、漢の河西制覇に伴い降伏した民族を移住させ管理したことの背景に、漢の河西制覇以前は、祁連山一帯は匈奴の支配下にあり、当然、その地域にいた

小月氏が中立を保っていたとは考えられず、この段階ではまだ軍事力に勝る部族連合国家であった匈奴の支配下に入ることが安全保障であった。もう一つは、移住しなかった小月氏は河西地方だけでなく寧夏南部の六盤山付近にもいたことを示している。そしてまた『史記』衛將軍・驃騎騎列伝に、武帝が驃騎將軍霍去病の祁連征伐の軍功を誉める言葉に、「驃騎將軍踰居延、遂過小月氏、攻祁連山、得酋涂王、以衆降者二千五百人、斬首虜三万二百級」の一節があり、霍去病が居延から南下し、小月氏のいたところを過ぎ祁連山に居た匈奴を攻撃した。これにより、居延、祁連間に小月氏がいたことが分かる。小月氏を示す遺跡と考古資料は未発見であるが、しかし、青銅器文化の共通部分から、月氏は遊牧、牧畜、商業といった多様な生業に従事していたことが十分に考えられる。

注

- 1) 前田正名 1964『河西の歴史地理学的研究』。
- 2) 横田禎昭 1982「河西における匈奴文化の影響—沙井文化考—」『史学研究』157号。
- 3) Andersson. J. G. 1925 "Preliminary Report on Archaeological Research in Kansu." *Memoirs of the Geological Survey of China*, series A, No. 5.
- 4) 甘肅省博物館文物工作隊 1981「甘肅永登榆樹溝の沙井墓葬」『考古与文物』4期。甘肅省博物館文物工作隊、武威地区展覽館 1984「甘肅永昌三角城沙井文化遺址調査」『考古』7期。甘肅省文物考古研究所 1990「永昌三角城与蛤蟆墩沙井文化遺存」『考古学報』2期。
- 5) 新疆維吾爾自治区文管会 1982「新疆木壘渠四道溝遺址」『考古』2期。新疆維吾爾自治区博物館考古隊 1981「新疆奇台渠半截溝新石器時代遺址」『考古』6期。
- 6) Andersson. J. G. 1923 "An Early Chinese Culture", *Bulletin of Geological Survey of China*, No. 5. (=1923 袁復礼訳『中華遠古之文化』。)

この論文で「河南とアナウとの距離は極めて大きい、この二つの地方は南は西藏の高地、北はシベリアのタイガにはさまれた延々と連る移動の大道によって結ばれている。」と述べ、また、「近東地方一帯から露領トルキスタンに広汎して居るから、アジア大陸を横断し、支那トルキスタンを経て支那に到る経路は、容易に発見されるであろう」と述べている。この段階では、おもに彩陶伝播のルートについてアジア大陸を横断する漠然とした道を想定したに過ぎなかった。しかし、彩陶は別にして、この逆ルートこそ月氏の西遷のルートに他ならず、まさに卓見である。
- 7) 註3) 参照。
- 8) 田 広金 1976「桃紅巴拉の匈奴墓」『考古学報』1期。
- 9) 塔 拉、梁 京明 1980「呼魯斯太匈奴墓」『文物』7期。
- 10) 周 興華 1989「寧夏中衛渠狼窩子坑的青銅短劍墓群」『考古』11期。
- 11) 註4) 参照。
- 12) 註4) 参照。
- 13) 寧夏文物考古研究所 1995「寧夏彭堡子家庄墓地」『考古学報』1期。
- 14) 寧夏文物考古研究所、寧夏固原博物館 1993「寧夏固原楊郎青銅文化墓地」『考古学報』1期。
- 15) 寧夏文物考古研究所、中国社会科学院考古所寧夏考古組、同心県文物管理所 1988「寧夏同心墩子匈奴墓地」『考古学報』3期。
- 16) 蓋山林 1965「内蒙古自治区准格爾旗速機溝出土一批銅器」『文物』2期。
- 17) 護 雅夫 1970「匈奴遊牧騎馬国家と北方遊牧民族」護 雅夫編『漢とローマ 東西文化流1』平凡社。
- 18) 甘肅省文物工作隊、臨夏回族自治区文化局、東郷族自治区文化館 1984「甘肅東郷林家遺址發掘報告」『考古学集刊』4期。

- 19) 北京鋼鉄学院冶金史組 1981「中国早期銅器的初步研究」『考古学報』3期。孫淑雲、韓汝玢 1997「甘肅早期銅器的發現与冶煉、制造技術的研究」『文物』7期。
- 20) 王巍 2001「漢時代以前のシルクロードを探る－考古学の資料を中心に－」早稲田大学シルクロード調査研究所編『甦るシルクロード』(予稿集)。
- 21) 註20) 参照。
- 22) 新疆文物考古研究所編著 1999『新疆察吾呼』東方出版社。
- 23) Andersson J. G. 1929 “Der Weg über die Steppen.”, *B.M.F.E.A.* No. 1.
- 24) 尹盛平「西周蚌雕人頭像種族探索」『文物』1986年1期。
- 25) 樋口隆康『インド・中央アジア』シルクロード考古学 第1巻 法蔵館 1986年。
この遺跡の4号墓副葬品の小刀を入れた黄金の鞘(長さ25cm)は、両側の方形区画内に卍形とハート形を対角線で区切った間に入れた文様が交互に並んでいる。また、卍紋の遺物が、TaxillaのSirkap遺跡のA.D.1世紀のパルティア時代層から出土している。
(卍文様は、中国の新石器時代の甘肅仰韶文化馬廠類型の青海省民和県加仁庄遺跡の彩陶文様にあるのが最古であるが、時代が違うため無関係である。)
- 26) Rudenko S. I. 1951 “По Следам Древних культур.” (=1969 加藤九祚訳「パジリク古墳を造営した種族」『西域の秘宝を求めて』新時代社。)
- 27) 註17) 参照。
- 28) 榎一雄 1959「サカゾク」『アジア歴史事典 4』平凡社。
- 29) 陳育寧 1993「諸論」『寧夏通史』寧夏人民出版社。
- 30) 羅豊 1990「固原地区歴代建置沿革考述」寧夏固原地区地方志弁公室編『固原史地文集』寧夏人民出版社。

キーワード：沙井文化 寧夏 河西回廊 月氏 青銅器文化

(YOKOTA Yoshiaki)